

伊豆諸島の巫俗と死者の口寄せ

——八丈島と青ヶ島の事例から——

宮澤 早紀

【抄録】

本稿では、伊豆諸島にある八丈島と青ヶ島の巫者が行う死者の口寄せの事例を報告している。八丈島と青ヶ島ではミコと呼ばれる女性の巫者が、死者の口寄せを行う。これが「ナカヒト」や「ナカシト」と呼ばれた。当該地域には、ミコ以外に男性の巫者が存在する。男性の巫者と女性の巫者が共に巫業を行っていた点が、八丈島と青ヶ島の巫俗の特徴である。巫者は住民の依頼に応じて、病氣治しや生業や航海安全などの祈祷、ナカヒトを行った。こうした巫業を通して、近年まで巫者が住民の生活にかかわってきた。八丈島と青ヶ島では近年まで巫者以外の宗教者が日常生活に関与することが少なく、巫者が宗教行為にたいして総合的な役割を果たしたと考えられる。こうした巫者の役割の1つとして、ナカヒトがあったと考えられる。

キーワード：巫俗、巫女、口寄せ、ナカヒト

はじめに

本稿では、地域社会で活動する巫者が死者にかかわる事例を報告する。対象となるのは、八丈島（東京都八丈町）・青ヶ島（東京都青ヶ島村）の巫者である。八丈島と青ヶ島には、ミコと呼ばれる女性の巫者とシャニンと呼ばれる男性の巫者が存在する¹⁾。当該地域では、この男性と女性の巫者が、病氣治しや失せ物の占い、安産祈願、航海安全や生活の無事安泰などの様々な祈祷を行い、近年に至るまで、住民の生活に関与してきた。このうち死者の口寄せをする巫者はミコの方であり、「ナカヒト」や「ナカシト」と呼ばれた。

八丈島の巫業は時期によってその方法が異なるが、ナカヒトが行われている事例は少ない。青ヶ島の巫業の多くは1年の中である程度日程が決まっており定期的に行われていた。先行研究ではこれらの事例が中心で、ナカヒトはこれらに含まれない巫業として報告されている。このように八丈島と青ヶ島の巫者研究を見る限り、ナカヒトはそれほど頻繁には行われていない。こうした状況からナカヒトは巫者の役割としてあるものの、巫業全体としてみると臨時の巫業であったと考えられる。以上をふまえて本稿にてナカヒトという巫業を一度整理することは、八丈島と青ヶ島の地域社会において、巫者が求められた役割の全体像を明らかにする上で必要な作業と考えられる。そこで本稿では、ナカヒトがどのような目的でどのような場面で行われたのか、先行研

究及び自身の調査に基づく事例を整理する。そしてナカヒトが、八丈島と青ヶ島の巫者の役割の中でどのような意味をもっていたのか考察する。

なお、本稿では、巫者をとりまく民俗を総括して「巫俗」と呼ぶ。巫俗とは、これまで民俗学や宗教学研究において用いられてきた言葉である。韓国のシャーマニズムをさす場合²⁾や日本でも超自然的存在と交流する人物を巫として、そこにかかわる巫業を俗とし、宗教形態として把握しうるものをさす場合³⁾などがある。このように巫俗とは巫者や巫業を中心とした宗教形態をさしている。本稿ではこうした意味に加え、住民や巫者を取り巻く諸要素を広く巫俗と呼ぶ。

1. 八丈島と青ヶ島の概況

八丈島は、東京から約 287 km に位置する⁴⁾。島の面積 69.09 km²、南東部の三原山と北西部の八丈富士から成り立つ。島は、大賀郷・三根・樫立・中之郷・末吉の 5 地区に分かれている。このうち大賀郷・三根で形成される坂下地域、樫立・中之郷・末吉で形成される坂上地域にわけられる。2017（平成 29）年 8 月時点で、世帯数 4392 戸、人口 7591 人、うち男性 3776 人、女性 3815 人である⁵⁾。八丈島の特徴に、島外への移動を黒潮の流れに阻まれ、渡航が困難な時代が続いたことが挙げられる。しかし島への交通手段は青ヶ島より早くに改善していく。船便は、1930 年代後半から観光客の増加を受け、充実していった。1950 年代には不定期であるが飛行機が利用できるようになった。さて、八丈島は島外への移動が困難であったものの、江戸時代は絹織物である黄八丈の生産が盛んであり、江戸と経済的な結びつきがあった。さらに流謫地でもあり、外部からもたらされた文化が島の生活文化を育んだ。主な生業として、明治時代までイモの栽培を主とした農業が行われた。明治以降は、漁業や畜産業が主生業となった。戦後は、熱帯観葉植物の栽培が盛んである。一方、青ヶ島は、東京から約 385 km、八丈島から約 70 km に位置する。島の面積は

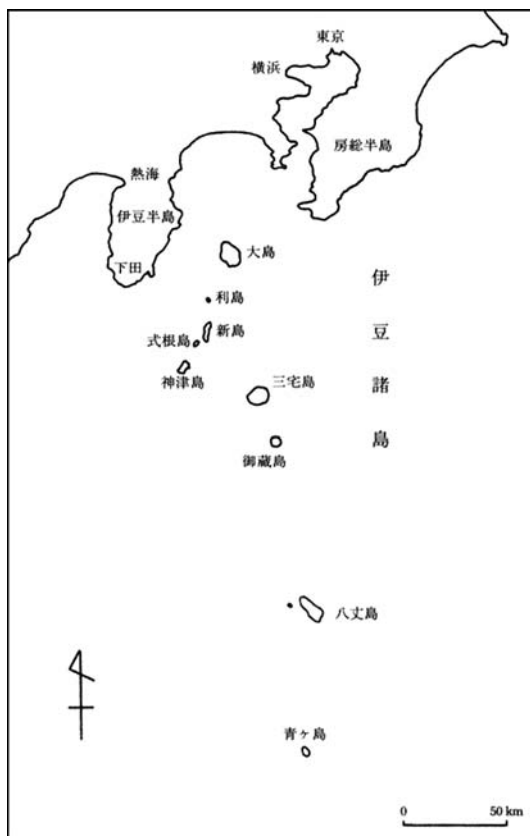


図1 伊豆諸島位置図
八木透『婚姻と家族の民俗的構造』, 吉川弘文館, 2001 年, 28 頁。

5.89 km²と、八丈島より小さい。島の北東部の火山傾斜地を岡部、南東部の火山カルデラ地帯を池之沢と呼ぶ。このうち居住区は岡部である。八丈島と同様、島は黒潮の流れに阻まれており、渡航には危険が伴う。さらに島自体が急峻な崖に囲まれているため、湾岸施設を作ることが困難であった。このため八丈島以上に、島外との交流が絶たれていたといえる。1960年代まで人や物資の運搬は危険の伴う艀作業で行った。1970年代以降、ようやく船便が増加していった。船は現在も八丈島を経由しなければ青ヶ島へ行くことはできず、八丈島は青ヶ島の窓口といえる。平成29（2017）年8月時点で、世帯数111戸、人口は168人、このうち男性91人、女性77人である⁶⁾。主生業がこれといてない点が青ヶ島の特徴でもある。明治時代まで鰹漁が盛んであったものの、明治以降、徐々に漁業は衰退する。その後、イモを主とした農業が続いていく。八丈島と青ヶ島は、後述する先行研究において、類似した社会構造や文化を持つと考えられた。島の概況から、黒潮に囲まれた地理的条件やイモを主とした農業など類似点もみられる。一方で、島の面積や人口規模、江戸との結びつきなどの歴史的背景が異なる。特に青ヶ島は、船便が増加するまで島外との交流が断絶していたといえる。この点が、八丈島と青ヶ島の巫俗をとりまく状況に違いをもたらしている。青ヶ島では、本土でみられる僧侶や神主など巫者以外の宗教者が存在しなかった⁷⁾。そのため、巫者が宗教行為を一手に担ってきたと考えられる。

2. 八丈島と青ヶ島の巫俗

さて、伊豆諸島の民俗にかんする研究は、大間知篤三にはじまる。大間知は、伊豆諸島の文化的特徴から大島・利島・式根島・神津島・三宅島・御蔵島を北部、八丈島・八丈小島・青ヶ島を南部と大別した。北部と南部をわける根本として黒潮の存在があり、北部と南部の交通を妨げ結果として文化的差異が生じたとしている。南部にあたる八丈島と青ヶ島は、家族制や婚姻習俗などの社会構造の共通性が指摘された。その後、研究動向をみると青ヶ島の巫者が注目され、巫俗をテーマとした研究が多くなる。一方、八丈島の巫者にかんする研究は少ない。さらに八丈島と青ヶ島を比較する視野をもちつつも、巫俗を比較する視点はみられなかった。こうした動向にたいし、土屋久によって八丈島と青ヶ島の巫俗の比較が行われている。八丈島と青ヶ島が類似した文化基盤を保持している点を踏まえ、巫俗に関しても同様の見方をしている。

それでは、こうした研究の対象であるミコとはどのような巫者なのか。八丈島と青ヶ島のミコは、基本的には類似した特徴をもつが、違いもみられる。まず八丈島のミコは、住民の依頼に応じて神霊や死者霊などの超自然的な存在と交流し、災いの原因を明らかにし、祈祷をする。ミコは巫業を行う時、単独である場合もあれば、複数がグループとなって行う場合もあった。以前、ミコは男性の巫者と共に巫業を行っていたと考えられる⁸⁾。さらに近年、青ヶ島から八丈島へ渡り、ミコとシャニンで巫業を行った例はあるものの、長くミコは、男性の巫者を伴わず巫業を行っていたようである。ミコになる女性は、それ以前に必ず精神異常な状態になり、ミコになりた

くて仕方がないようになる。この状態をミコケと呼ぶ。若い女性よりも 50, 60 歳の高齢で閉経した女性が多い。ミコケのある女性がミコになる際には、カミソーデと呼ばれる入巫儀礼が必要である。ミバコという自分の神霊を収める箱を造って、それを据えて他のミコに拝んでもらい、オボシナサマと呼ばれる神霊を移してもらう。オボシナサマは人によって異なる。ミコになると、住民からの依頼に応じて様々な巫業を行った。航海安全や生業など日常生活の様々な祈禱、失せ物の占い、身の上相談、病氣治し、そして死者を呼び寄せて話をするナカヒトなどである。これらのミコの役割は、住民から個人的に依頼されるものであった。神社の祭祀に、ミコは関与しない。八丈島の各地区に一つ氏神社がある。各神社に神主がいるわけではない。神主は八丈島の総鎮守である優婆夷宝明神社にしかない。このため、秋季の祭礼には優婆夷宝明神社の神主が、全地区に出張する。このように、神社の祭祀は神主が執り行い、ミコが役割を果たすことはなかった。以上が八丈島のミコの特徴である。

これに対し、青ヶ島のミコはやや事情が異なる。青ヶ島のミコは八丈島のミコと同様に、住民の依頼に応じて、様々な巫業を行った。巫業の内容は八丈島と共通しているものが多い。しかしミコは単独で巫業を行うのではない。ミコのほかに、カンヌシ、ウラベ、シャニンと呼ばれる役割が存在し、彼らと共に巫業を行った。1970 年代頃には、カンヌシ、ウラベを継いでいた家系が途絶えシャニンがその役割を兼任するようになった。巫業では男性のシャニンが祭文や経文を唱えて太鼓を叩き、女性のミコが踊って神がかりをして託宣を行う。多くの場合は神霊が災いの原因として説明される。このようにミコとシャニンが共に祭祀を行い、相互補助の関係にある点が青ヶ島の巫俗の特徴である。この形態は八丈島では消滅している。青ヶ島でもミコになる女性は精神異常な状態になる。先輩ミコからミコケがあると判断されると、カミソーゼという入巫儀礼を受ける。八丈島と同様、若い女性よりも 50, 60 歳の高齢で閉経した女性が多い。先輩のミコ・シャニンが加わり、祭文を唱えて踊り、ミコになる女性が神がかりになりオボシナサマと呼ばれる神霊が憑くのを待つ。オボシナサマが憑くとミコとして認められる⁹⁾。八丈島と同様、オボシナサマの種類は人によって異なる。こうした一連の入巫儀礼は八丈島と共通している。一方、青ヶ島ではミコやシャニンは、八丈島のミコのように個人的な依頼に応じたものだけではない。神社の祭祀も彼らによって行われた。青ヶ島で神社と呼ばれるのは大里神社・東台所神社・金毘羅神社・渡海神社などである。各神社に神主はいない。地区ごとに氏神社も決まっていない。こうした神社はミコやシャニンによって祀られていた。このように、青ヶ島では住民が参集して神社で行われる公的な祭祀と、個人的な依頼を受けて行う私的な祭祀の両方において、巫者が役割を果たしたのである。

ここで八丈島と青ヶ島の巫者以外の宗教者を確認しておく。八丈島には前述した神主に加え、僧侶が寺院に在住している。島の檀那寺として宗福寺、長楽寺の二寺がある。大正年間から善光寺が加わった。地区ごとの檀那寺は、三根が善光寺、大賀郷が宗福寺、中之郷・榎立・末吉が長楽寺である。寺院の僧侶は葬儀の際、それぞれの地区へ出張する。一方、青ヶ島には清受寺とい

う寺院がある。八丈島の宗福寺の末寺である。僧侶がいた時期もあったが、明治以降は僧侶のいない無住の寺である。島には現在も僧侶はいない。戦後にはボーサマ役といって住民が僧侶役を引き受けていた。本土から仕事で訪れた人で、僧侶資格を持つ人がいる場合はその人にボーサマ役を頼んだ。島では盆や葬式や四十九日の時に念仏和讃を唱えるが、これは住民が参集して行う。この際、ボーサマ役や念仏和讃を唱えられる人物が音頭取りをする。シャニンがしていた場合もあり、現在はお年寄りが中心となっている。このように八丈島と青ヶ島では、住民の生活の身近にいて宗教行為を担う人物が、氏神社の神主や檀那寺の僧侶であったわけではない。彼らは祭礼や葬儀など特別な行事の際、地区へ出張してくることが多い。普段の生活で必要とされた病気治し、生業や航海安全など様々な祈禱は巫者に求められたと考えられる。

3. ナカヒト

八丈島と青ヶ島のミコを比較すると、青ヶ島ではミコやシャニンが共に巫業を行い、その役割が公私にわたる点において八丈島と異なる。しかしミコになる条件や個人的な依頼による祈禱を引き受けた点は共通している。そして依頼される巫業は、普段の生活で必要とされる内容が多い。ここから、巫者が住民の生活の身近に存在し、その役割を果たしたと考えられる。それでは、死者の言葉を聞く、ナカヒトはどのような場面で行われ、八丈島と青ヶ島の巫俗において、どのように位置づけられるのか。

ナカヒトにかんする報告は、大間知が最も早い。八丈島のナカヒトについて次のように述べている。「巫女を頼んで、死人の言葉を聞くことを、ナカシトを聞くと、シトリヨウを聞くとともいう。巫女によってナカシトの憑くのと憑かないのとがいる。死んだ人が現世にいた時と同じ声、同じ話しぶりて語り出すので、聞いている者はみな泣き出す。アラボトケほどよく通ずるといふ。ミコは亡者に太刀や弓をあげろということをよくいう。悪霊を払うためである。また海で死んだ人には、舟型を供えろとよくいう。舟を欲しがらるからである。」¹⁰⁾大間知の報告から、依頼を受けたミコが死者を口寄せし、その言葉を聞くことが「ナカシトを聞く」と呼ばれていることがわかる。ここでは具体的にミコがどのような場面でナカヒトをしているか不明である。しかし死者の言葉を聞きたい遺族の依頼に応じて、生きている人と亡くなった人の意思疎通をはかる役割を、ミコが担っている。また死者の欲しがっているものを用意し、供養するようである。さらに次のような報告もある。「どの巫女でも神がかりになるには、南無妙法蓮華経と言い続け、5、6分にして神がかりになるといふ。イキグチとシニグチとがあり、シニグチをナカシトともいふが、ナカシトのつく巫女は半数ぐらいいかない。」¹¹⁾ここでのイキグチとシニグチは生口と死口と思われる。また、ナカヒトのできるミコは限られていたようである。

このように八丈島で死者の口寄せをするミコの報告がある。これに加え、筆者が末吉地区¹²⁾で行った聞き書きでも次のような事例がある。「家族、牛が死ぬというように災いが起こると、ミ

コサマだ、といってミコサマのところへ行く。漁がない、魚が獲れない時もミコサマを拝む。《ミコバシリ》といって、ミコサマのところへ足を運ぶ。神に祈祷するような気持ちで、ミコサマに頼る。災いがあるミコサマに相談すると、《おまえのうちで、何年前、何々があった》と言われ、それが当たる。また《あの時死んでしまった者で、何々が欲しい》と言っているなどという。ミコサマに霊が乗り移る。普段は普通の人に、死んだ人が乗り移る。祈祷をしていると、その人の霊が乗り移り、口調までも似てくる。これをナカヒトと呼んだ。』¹³⁾この事例によるとミコが死者を口寄せするのは、依頼者に相談を受け、災いの原因を明らかにする時である。いま、依頼者にふりかかる災いは何年前に亡くなった誰が何かを欲しがっているため、と説明される。ミコはこのように依頼者の前で、災いの原因になっている現象について、死者の言葉で語るようである。これも八丈島におけるナカヒトであると考えられる。

以上の事例から、八丈島のミコが死者の口寄せを行うのは、2つの場合がある。1つ目は、死者の言葉を聞きたい遺族の依頼に応じる時である。2つ目は、依頼者にふりかかった災いの原因をミコが明らかにする時である。いずれにせよ、ミコが死者と意志疎通することは、巫業を行う上で必要であったことがわかる。そこに神霊とかかわる時、死者とかかわる時に特別な違いはみられない。

次に、青ヶ島の事例をみてゆく。青ヶ島では、ミコが死者を招きよせて、その言葉を伝えることがある。このミコをまたはミコを頼んで死者の言葉を聞く行為そのものをナカヒトと呼ぶ。四十九日、一周忌、三回忌、七回忌などの法事に、ナカヒトのできるミコは招かれる。このナカヒトができるのはミコだけである。また、依頼されなくても、巫業を行っている時に死者の言葉を口語ることもあるという¹⁴⁾。これらの事例から、青ヶ島でも八丈島と同様に、死者の言葉を聞きたい遺族の依頼に応じ、ミコがナカヒトを行うといえる。またナカヒトのできるミコは限られている点も八丈島と同様である。さらに巫業の最中、災いの原因を明らかにする時、死者の言葉を語ることがある点も八丈島と共通している。しかし八丈島と青ヶ島のナカヒトという巫業にかんする事例は他の巫業に比べてきわめて少ない。こうした状況を踏まえると、八丈島でも青ヶ島でもナカヒトは臨時の巫業であったのではないかと考えられる。それではなぜナカヒトは臨時の巫業であったのか。ここからはあくまでも推測の域を出ないが、青ヶ島や八丈島の場合、死者の口寄せが巫業のなかに包括されていたのではないか。事例にもあったように日常の巫業で度々死者の言葉を語ることがあり、それが住民にも受容されていた。そのため遺族が希望した時など特別な場合を除いて、ナカヒトとして表面化しなかったと考えられる。

ここで、ナカヒトをする場合は直接的に関係しないものの、青ヶ島のミコが死者とかかわる際には、特別な処置をとる点が八丈島と異なる。前述したようにミコになる時、入巫儀礼でオボシナサマと呼ばれる神霊が憑く。オボシナサマは普段はミコに憑いているが、ミコが死者にかかわる儀礼を行なう際には、特別な措置がとられる。ミコが念仏和讃に加わったり死者の納棺などで喪家に出向いたりする場合は、前もって祈祷し「オボシナヲハズシタ」とし自分がミコでないも

のとして参加する¹⁵⁾。またミコが亡くなった時、ミコは神様であるが浄土宗で葬るという。死にあたっては榊の枝と笹の葉を手にして「オボシナヲドカス」といって、通夜の晩に死者をなでる。これでミコではなくなったとする¹⁶⁾。このようにミコが死者とかかわる時、死穢を忌避する行動をとる。八丈島でこうした事例がみられたのは、近年青ヶ島から移住してきた巫者の関係する場合のみである。青ヶ島のミコはより死穢を忌避する傾向があると考えられる¹⁷⁾。

4. むすびー八丈島と青ヶ島の巫俗と死者の口寄せ

これまで八丈島と青ヶ島のミコが口寄せを行う事例を整理してきた。八丈島と青ヶ島では、巫者が遺族の依頼に応じてまたは巫業に際して死者の言葉を語ることをナカヒトと呼ぶことがわかる。そしてナカヒトは八丈島と青ヶ島では臨時の巫業であった。なぜなら、日常の巫業の中で巫者が死者の言葉を語ることがあり、遺族の依頼という特別な場合を除いて、ナカヒトが表面化しなかったのである。八丈島と青ヶ島の地域社会において巫者は広く生活に関与してきた。巫者は病気や出産、不作や航海など孤立しがちな離島で生活していく上で付きまとう様々な不安を超自然的な存在と交流することで、何らかの解決に導く役割を担っていた。その役割の中には死者とのかかわりによって、死者の言葉を遺族に伝えるナカヒトも含まれていたのである。

以上、本稿では八丈島と青ヶ島の死者の口寄せにかんする事例を整理し、巫者の役割の中でどのような意味をもっていたのかについて考察を試みた。八丈島と青ヶ島の地域社会において巫者が求められた役割は広く、全体像を明らかにするためには巫業にかんする多角的な分析が必要である。本稿において試みた死者の口寄せという巫業の位置づけが、今後の分析の一助となれば幸いである。

引用文献

- 1) 『日本民俗大辞典』によると「巫女」は「超自然的な存在と人々の間を媒介する女性の宗教者。」(神田より子)と定義される。(福田アジオ [ほか] 編『日本民俗大辞典』吉川弘文館, 1999-2000年。599頁) この定義を参考に、本稿では巫者を超自然的な存在と人々の間を媒介し、予言、託宣、卜占、治病行為などを行う人物とする。八丈島と青ヶ島ではミコとシャニンが共に巫業を行い、原則、どちらか片方だけでは超自然的な存在と交流することができない点が特徴である。巫業ではシャニンが祭文を唱え太鼓を叩き、ミコはそれに合わせて踊って神がかりをする。このようにミコやシャニンが巫業で果たす役割は異なるものの、本稿ではどちらが巫者でもう片方は巫者でないという巫者の本質を問う議論をするのではない。ミコとシャニンが共に巫業を行い、地域社会にどのように関わってきたのかを問うものである。したがって、ミコもシャニンも広く巫者として捉え分析を行う。
- 2) 全成坤「韓国の宗教」(川村邦光 [ほか] 編・山折哲雄監修『宗教の事典』), 朝倉書店, 2012年。345頁。
- 3) 櫻井徳太郎「巫俗の地域性」(五来重 [ほか] 編『講座日本の民俗宗教 巫俗と俗信』第4巻), 弘文堂, 1979年。41頁。
- 4) 八丈島と青ヶ島の位置については図1を参照。
- 5) 八丈町公式ホームページ (<http://www.town.hachijo.tokyo.jp/> 2017/9/11)

- 6) 青ヶ島村役場ホームページ (<http://www.villaogashima.tokyo.jp/office/outline.html> 2017/9/11)
- 7) 後述するが島には清受寺と呼ばれる寺はあるものの僧侶がいない。清受寺は元禄年間に八丈島宗福寺の末寺として建立された。当時は僧侶がいたが、その後いつごろから僧侶がいなくなったのかは不明である。戦後もない頃にはボーサマ役と呼んで住民が僧侶の役を行っていた。青ヶ島村教育委員会・青ヶ島村編『青ヶ島の生活と文化』青ヶ島村, 1984年。893頁。
また、島のカンヌシについて「奥山神主家のほぼ世襲。ただし本来は卜部的な能力（とくに審神的な能力）が必要。いわゆる神社神道の宮司とは役割が違う。」という。菅田正昭『青ヶ島の神々〈でいらほん流〉神道の星座』創土社, 2012年。48頁。さらに寺や神社と呼ばれる場所はあるが、いずれも宗教法人ではなく、島には法律上規定された神社・寺が存在しない。こうした状況から島の宗教行為は巫者が中心となって行なっていたと考えられる。
- 8) 本田安次は八丈島の巫業形態について次のように述べている。「八丈島の旧五か村に、それぞれ卜部と呼ばれる神職がいた。正しくは巫女はこの卜部とともに祈祷をしたものである。（中略）優婆夷宝明神社の宮司菊池萬助氏の談によると、もと卜部は中臣の祓で太鼓をたたき、各戸をまわって祈祷をした。卜部の太鼓と祭文に合せ、巫女は舞を舞った。』『東京都民俗芸能誌』（下巻）、錦正社、1985年。954頁。
- 9) 青ヶ島でミコのミコケのように、シャニンになるための特別な条件はない。かつては世襲だったともいう。それでもシャニンとして祭祀に参加するためには、祭文や経文、太鼓の叩き方を習得する必要がある。
- 10) 大間知篤三『伊豆諸島の民俗Ⅰ』（大間知篤三著作集第4巻）、未来社、1978年、439頁。1930～40年代の調査に基づく末吉地区の事例。
- 11) 前掲書、439頁。1930～40年代の調査に基づく。大賀郷地区の事例。
- 12) 2017（平成29）年8月時点で、世帯数197戸、人口305人、男性153人、女性152人。前掲（4）八丈町ホームページより。
- 13) 筆者の2016（平成28）年3月の聞き書きに基づく。事例は、1950年代頃の話であるという。
- 14) 嘉儀起代子「青ヶ島におけるシャマンについて」（『京都民俗』、1987年）59頁。1980年代の調査に基づく。
- 15) 小林亥一「青ヶ島の信仰－島神信仰を中心として－」（網野善彦〔ほか〕編『海と列島文化 黒潮の道』第7巻）、小学館、1991年、399頁。1960～70年代の調査に基づく。
- 16) 蒲生正男・坪井洋文・村武精一『伊豆諸島：世代・祭祀・村落』、1975年、未来社、543頁。1958（昭和33）年の調査に基づく。
- 17) このようにナカヒトとの関係は不明であるものの、八丈島と青ヶ島ではミコが死者とかかわる際に死穢を忌避するか否かで違いが見られる。こうした巫者と死穢をめぐる八丈島と青ヶ島の違いは、今後の課題としたい。

参考文献

- 大間知篤三『伊豆諸島の民俗Ⅰ』（大間知篤三著作集第4巻）、未来社、1978年。
土屋久・堀口久五郎「八丈島・青ヶ島におけるカナヤマサマ信仰 呪詛・ミコ・病い」（『人間科学研究』32号、2011）217-227頁。
八丈町教育委員会編『八丈島誌』八丈島誌編纂委員会、1973年。
青ヶ島村教育委員会・青ヶ島村編『青ヶ島の生活と文化』青ヶ島村、1984年。

（みやざわ さき 佛教大学大学院修士課程）